



ヤマシナポートレート アーカイブス

「ヤマシナポートレート」展は、年齢や性別、障害の有無などに関わらず、山科区にゆかりのあるひとたち約300人の「目を閉じた」ポートレート写真展です。

「目を閉じること」。それは、普段見られない表情が映し出されること。そして目を閉じたひとたちの姿をとおして、新たな見方に気づいたり、一緒に目を閉じれば、互いの距離を縮めることもできるでしょう。

本展が、地域に住むひとたちの多様性や、障害のあるひとと社会とのつながり、地域住民同士のつながりなどを見つめ直すきっかけとなり、ひいては多くのひとがつながる場となることを願っています。

道のり

- 2014年 5月 平成26年度山科“きずな”支援事業に認定
- 6月 撮影スタート
- 8月 「京都市山科身体障害者福祉会館」にて撮影会・ワークショップ開催
- 9月 「自動車総連」より、フォトプリンター等の備品を受贈
- 11月 「京都大学花山天文台」一般公開にてスライドショー展示
- 11月 高齢者施設「香東園やましな」にて撮影会開催
- 2015年 2月 「ヤマシナポートレート」展開催(5日～14日:ラクト山科ショッピングセンター4Fアトリウムデッキ)

メディア

- 2014年8月14日 京都新聞 朝刊 市民版
- 9月 5日 NHK総合テレビ 京都放送局「ニュース610 京いちにち」
- 2015年2月 4日 朝日新聞 朝刊 京都版
- 2月 5日 NHK総合テレビ 昼のニュース 関西ローカル
- 2月 5日 NHK総合テレビ 京都放送局「ニュース610 京いちにち」
- 2月 6日 京都新聞 朝刊 市民版
- 2月 7日 リビング京都「まちナビ」



参加者メッセージ

写真展の話聞き、山科身障会館でのワークショップ&撮影会の開催をお願いしました。ワークショップは和気藹々。偶然来ていた人たちもたくさん撮影会に参加してくれ、会場は輝く笑顔があふれていました。そして、私も被写体に。写真がつながる人と人。とてもあったかい気持ちになりました。そして、目を閉じた写真がずらりと並んだ圧巻の展覧会。目を閉じている写真だからこそ感じられるその人の内なる思いや経験。様々な人生が目の前にパノラマのように広がり、人はいろんな人につつまれ、つながり、共存していることを実感させてもらいました。

松原 直久(京都市山科身体障害者福祉会館 館長)

ヤマシナポートレート 座談会

京都造形芸術大学 × ヴァリアス・コネクションズ

2014年6月より撮影をスタートした「ヤマシナポートレート」展。2015年2月に展覧会を開催するまでの約8ヶ月間の「いきさつ」や「裏話」を、企画・運営に携わった山科区にゆかりのある4人で話し合いました。さて、どんな話が飛び出すでしょうか。



「ヤマシナポートレート」展をおこなうきっかけ

大野木 まずはヤマシナポートレートをおこなうきっかけを教えてくださいませんか？

成実 勤務している障害者施設で以前から障害のある人たちの展覧会をおこなっていました。2012年には畳1枚の上に立体作品を設置し、京都府立医科大学附属病院、京都大学総合博物館ほか京都市内14箇所で開催しました。1畳分のスペースならどこでも展示させてもらえるかなと思って。京都造形芸術大学の@カフェで展示とワークショップ(以下 WS)もおこなったのですよ。こども芸術学科の学生さんが参加してくれました。

大野木 へ～。知らなかった(笑)

成実 この展覧会が終了し、今後は生まれ育ち現在も暮らしている山科区で、芸術を通して障害のある人が社会とつながる活動しようと思って、2013年に市民団体「ヴァリアス・コネクションズ」を立ち上げました。まずは「芸術」「障害者支援」をキーワードに山科区で活動されている方にスポットを当てたフリーペーパーを発行しました。そして今年度は障害の有無に関係なく色々な人たちが共有できる場を作りたいと思って、ヤマシナポートレートを企画したんです。

北村 なぜ写真展にしようと思ったのですか？

成実 デジカメを使うってボタンを押すだけですし、子供から高齢者まで、また障害のある人たちにも身近で扱いやすいメディアなので、以前から WSなどで使っていました。企画当初から山科区民のポートレート写真を集めた展覧会をしようと考えていましたが、普通の写真では何か面白味が欠けるなと思い、「目を閉じる」というルールを設けました。

目を閉じる

北村 じゃあ「目を閉じること」は、どんな経緯で考えたのですか？

成実 まずは年齢や障害に関係なく誰もが簡単にできること。重度障害のある人でも簡単にできることにしようと思いました。また、

ある日ふと息子の寝顔を見たとき、日頃彼を見ている視点からズレが生じて、さらに自分自身を振り返る機会になったんです。もう少し優しく接した方が良かったのかな。そういう視点で地域の人たちがお互い見合ったら、人と人の関わりも変わるのではと思い、「目を閉じる」というルールにしました。山科のヤンキーっ子たちも目を閉じると意外と可愛いんじゃないかと(笑)

大野木 「目を閉じる」というルールは、いい考え方だと思いました。多くの方はまずものを見て、社会と繋がっていると思います。しかし目を閉じた途端それがシャットアウトする。目の前のものとの関係性が急に変化するんです。それは外界との接点を目から体や耳にスイッチを変え、ふっと自分に戻ってくる。切り口として面白いし、普通のポートレート展とは違うもっと深い意味があるのではないかと思います。

成実 そういえば、撮影中に「自分の目を閉じた表情って普段見ることができないし、面白いね」と言われたことがあります。あえて自分の目を閉じた表情を見ることで、自分自身の見方に変化がおきるということも興味深いです。

北村 私もこの企画は面白いと思いましたが、大野木先生とは反対のことを考えました。目を閉じることにより、余計に自分の周りにいる人や物のことが気になる。ちょうど盲導犬支援の仕事にも携わっている時期で、支援者の人から「目を閉じれば平等になる」と聞き妙に納得したところでした。「見た目」の区別以上に、もっと慎重に周りの他者や世界を視て、感じることはできるのではないかと思います。

かかわることの大切さ

北村 写真はどのように集めていったのですか？

成実 私が撮影することが多かったのですが、中島さんや山科の大学生、企業の人たちに撮影を協力してもらいました。あと、撮影会やWSもおこないました。

大野木 ポートレートの写真の一部には障害者同士や障害者と健常者者の撮り合いっこした写真もありました。私は障害者の人と撮り合ったのですが、コミュニケーションが難しかったです。どうすれば楽しくなるか、どうすれば写真を通じて心を通わせられるか。思った以上にそこが掴め切れなかった気がします。





Photo: Yudi

成実 確かに難しいですね。でも、そういったコミュニケーションの積み重ねが大切だと思います。その中でお互いが徐々に理解していくという。京都市身体障害者福祉会館では引き続き写真をテーマにしたWSをおこなう予定ですが、地域の人や施設の人が関わりあえる場作りを地道におこなっていきたいです。

大野木 撮りあいつつしながら盛り上がり、「もっといい写真撮ろう！」とか言いながら出来上がった写真には“コミュニケーションしている”という空気が垣間見えたんじゃないかな。そんな写真がもっと増えたら、この展覧会は更にいいものになったと思います。それは写真を介在させることで、普段できないコミュニケーションが確実に生まれたのですから。

苦労したこと

成実 展覧会までのプロセスの中で一番大変だったのは、設置の時でした。撮影も大変でしたが、ある程度時間に余裕もありましたし、色んな人が協力してくれました。しかし設置は場所にも時間にも制約があり、想像以上に大変でした。

中島 設置は成実さんと私、そして同じ学科の友人2人の計4人で行いました。その2人に手伝いをお願いする際、「地元山科で開かれる写真展を手伝って欲しい」と言ったのですが、「あの山科？」と驚いた反応をされました(笑) 当日はパネルを会場に運搬し、そこに虫ピンで約300枚の写真を貼る作業、そしてそのパネルを固定・設置しました。普段は学科が運営しているギャラリーで活躍している2人も想像以上に大変だったようでヘトヘトになってました(笑)

北村 慣れない現場はしんどいですよね。ましてや、ギャラリーでも美術館でもない場所となると。しかも「あの山科」で(笑)

芸術と社会

大野木 京都造形芸術大学は、芸術を通して、一人ひとりを認める、それぞれのオリジナリティーを大切に生きていこうと呼びかけています。特別なアーティストや天才をつくればいいのではなく、芸術を持って生きていくことで人生を豊かなものにし、より良い社会を創ろうとすること。芸術教育のこれからの大きな役割は、色んな人がいていい、さらにはもっと個性豊かに生きる手立てを見つけ、人間性を高いレベルに導くことであると思っています。他人に勝つことより、ひとの良さを認め合う社会が来てほしいのです。

成実 今の社会ってスタートからゴールに向かうプロセスの幅が狭

くなっているように感じるんです。それとは違う方向に進む人を受け入れる社会をどのように作っていくのか。それには芸術の役割は大きいと思います。個人的には高齢者問題も大きな課題だと思っていて、将来3人に1人が高齢者という時代がやってきて、認知症高齢者も急速に増えてきます。それを社会全体がどう支えていくのか。寛容性のある社会でないといけないと思います。

展覧会を終えて

大野木 展覧会を見たお客さんの質問や感想で、傾向的に多かったものはなんですか？

成実 展覧会のキーワードである「目を閉じる」ことに反応された方が多かったですね。なるべく「目を閉じる」表情が浮かび上がるようモノクロ写真にするなどキーワード以外の要素を省く工夫をしました。展覧会開催中、鑑賞者の中には泣いておられる方もいて、お話を聞くと、「目を閉じた顔の背景に、その人の心や歴史が刻まれていて感動しました」とおっしゃっていただきました。写真を通していろんな想いを巡らせる瞬間があったこと、とても嬉しかったです。



大野木 啓人(おおのぎひろと)
京都造形芸術大学副学長。大学では彫刻を専攻。ディスプレイ会社でサラリーマンとして25年、あらゆるデザインの現場に携わる。今は美術館・博物館の企画や展示のアートディレクションを中心に、町おこしやイベント事業等で活動。山科区在住。



北村 英之(きたむらひでゆき)
京都造形芸術大学プロジェクトセンター課長補佐。同志社大学文学部を経て同志社大学大学院総合政策科学研究科修了。生まれてから18歳まで山科区民。「ヤマシナポートレート」展をきっかけに10年以上ぶりに山科に関わる。



中島 ぼたる(なかじまぼたる)
京都造形芸術大学アートプロデュース学科3年生(取材時)。大学では、展覧会の成り立ち、地域でのプロジェクト活動に携わる。「ヤマシナポートレート」展の撮影から設営までをサポート。山科区民歴、祝20年！



成実 憲一(なるみけんいち)
ヴァリアス・コネクションズ代表。静岡大学教育学部卒。現代美術の作家活動と障害者福祉に携わってきた経験から、「芸術」と「福祉」の両側面から互いに跨がる活動を展開中。「ヤマシナポートレート」展を企画・開催。生誕後ほぼ山科区民。



ヤマシナと「目を閉じた」ひとたち

たくさんの方々に支えられた「ヤマシナポートレート」展。展示の様子や開催までのプロセス、そして様々な人たちの思いを形あるものとして残したい、息吹を感じてもらいたいと思い、「ヤマシナポートレートアーカイブス」を発行する運びとなりました。約8ヶ月間にわたるプロジェクトの中で何より得たものは「人と人とのつながり」です。今後もその「つながり」が波紋のように広がっていくことを願って。最後になりましたが、ご参加頂いた皆様、そして多大なるご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。(成実)

ヤマシナポートレートアーカイブス(第二版)

発行日: 2020年12月1日

編集、デザイン: 成実 憲一 編集協力: 京都造形芸術大学(大野木 啓人、北村 英之、中島 ほたる)、稲留 京香 助成: 平成26年度山科“きずな”支援事業

発行: 一般社団法人ヴァリアスコネクションズ 〒606-8411 京都市左京区浄土寺東田町 67 番地 1 ジェンヒル 106 号室

MAIL info@various-c.com URL <http://www.various-c.com/>

